

本だいきすきスタッフから  
たのしみのおすそわけ

ぞくぞく集まって、第一集

おすすめの本や楽しみかたのアラカルト  
みんなそれぞれ、自分流

いつでも、どこでも

いくつになっても、たのしめる

あなたの楽しみかた

みつけてください

みんなで、本を楽しもう！”

# 本好きの薦める本たち

松村一男（図書館長）

大学で学ぶことの意味や形式ははげしく変わってきている。何のために大学に行くのか？と尋ねられて、明快に答えることのできる人なんて、なかなかいないのではないかな。知識を得るためだろうか？でも、そんなのネットのウィキペディアを見れば済むことでしょう。いや、知識一般ではなくて、専門的知識を得るためかな？そりゃあ、これからの人生でやることもう決まっていれば、それもいいけど、何をしたらいいのかわからないから、大学に来るってこともあるんじゃないかな。

そう、これからどうなるかわからない未知の未来が待っているから、その未来に向かう自分を見定めるために大学に来るのだというのが一番正解に近いかも知れない。そしてその答えは授業にも友達との交流にも、そして図書館の本の中にも潜んでいて、君たちが発見してくれるのを待っているのだらう。

そうした君たちと本との幸せな出会いの手助けとなることを願って、図書館ではこれまで二冊、この冊子と同じ体裁で和光大学の教員のそれぞれが推薦する三冊の本を『本を読もう！』という題名で作ってきた（第一集は二〇〇四年、第二集は二〇〇五年）。だから、どの先生がどういう専門的見地からどういう本を君たちに読んでほしいと思っっているかは、分かるようになった。

読んでみると、たしかにいい本、役に立つ本が推薦されていると思う。それらの本を図書館で見つけてドシドシ読んで

勉強してください。でも正直いうと、大学の先生が選ぶ本はちよつと硬いというか、敷居が高い感じもする。難しそうな本が多いよね。大学の先生はみんな、自分が仕事として研究している分野に誇りを持っているから、ついつい、その分野の立派な本を君たちに薦めたくなくなるんだよね。分かる、分かる……。

そういう勉強の本はもちろん必要だが、頭よりもっと心の方に届く本も紹介したいなあと思っていたとき、図書館で仕事をしている人たちから、彼らも君たちに薦めたい本を選んでいると聞いた。図書館の人たちは教員以上に本が好きである。大好きな人たちだ。彼ら一人ひとりが君たちのために選ぶ三冊、知りたくありませんか？それから、大学のいろいろな部署で働いている職員の人たちにも本好きはたくさんいます。そういう人たちにも声をかけたら、是非とも紹介の文章を書きたいという声が上がったので、図書館員だけではな

く、大学職員の人たちにも本を選んでもらいました。

ということ、ここにこうして図書館員と職員が選んだ三冊を集めた『本を楽しもう！』―「本を読もう！」職員版―を君たちにお届けします。楽しんで読んでください。そして興味を覚えた本を図書館から借りてじっくり読んで、それから自分や社会や過去や現在や未来のことを考えてください。

本書は、二〇〇六年夏に図書館職員が  
取り組んだ「本を読もう！」図書館員版  
―」の原稿（記載の所属等は二〇〇六年  
八月現在）をベースに、二〇〇八年二月  
に他部署の職員にも募った原稿を併せて  
作成しました（同二〇〇八年三月現在）。

部署も年代も異なる人々のさまざま  
視点が凝縮した一冊。前から読むも、後  
ろから読むも、楽しみ方はあなた次第で  
す！



学生時代の記憶が新鮮なみな  
さんに近いメンバーから  
人生の先輩である経験豊かな  
ベテランまで、原稿が勢ぞろ  
い☆

わたしたちが

好きな本を

何冊かあげると……

馥郁<sup>ふくいく</sup>たるコーヒーの香りに包まれて@ニューヨーク

①『ニューヨーク都市地図集成』 太田弘（柏書房）

②『ミスタードーナツのシュトックハウゼン』 菊地成孔

（雑誌『ユリイカ』第30巻4号所収、青土社）

③『オール・アバウト・コーヒー——コーヒー文化の集大成——』

ウィリアム・H・ユーカーズ（TBSブリタニカ）

図書館 清水滋文

①——一六六〇年〜一八七九年に作られたニューヨークの地図を集めた本。シリーズで、『パリ都市地図集成』や『近代アジア・アフリカ都市地図集成』などもあります。大きさが四十六×六十三センチ、定価が十二万六千円という、いろいろな意味でビッグな本なので、ぜひ図書館で手に取ってみてください。図書館の三階にあります。

ところで。図書館の三階には、貸出カウンターやパソコンの他に、「参考図書」というものが並んでいます。聞きなれないとは思いますが、これらをうまく使うと、（あえて言えば）「レポートや卒論がラクに書けます」とはいえ、使いこなすには多少のコツもいるので、図書館で行っている、レポートや卒論の書き方についてのオリエンテーションを受けてみてください。

②——ニューヨークといえば、この短編が思い出されます。

「一九五三年の秋に、現代音楽界の若きホープ（当時）、シュトックハウゼンはニューヨークで、悪夢のように甘いオーレディースとドーナツに溶かされていた」というフィクション。タイトルの他にも「ナイトクラブのクセナキス」など名フレーズがいっぱいです。雑誌なので貸出はできませんが、図書館の地下一階にあります。

ところで。図書館の地下一階には、雑誌や新聞のバックナンバーが並んでいるのですが、これもまた「使えます」。「使える」という意味は、ここであれこれ言うよりも、アート、デザイン、音楽、映画、文学、メディア、歴史、教育、経済など、興味のある分野の雑誌を手にとっていただければわかると思います。

また、「特定の人物や項目についての雑誌記事を調べたい」という場合には、オリエンテーション「本・雑誌・論文記事の探し方」を受けてみてください。

③「ドーナツといえばコーヒーですが、これはまさにコーヒー百科。大抵の「オールアバウト」には驚きませんが、これは別格。初版は一九二二年、調査期間三十年。五十ページあまりに渡る「第三十六章コーヒーのたて方の変遷」や、巻末資料「コーヒー類語集」など、ユーカーズさん（フロム・

フィラデルフィア）の深すぎる愛情の成果。深煎り。

図書館には、書店にはあまり置かれていない本もたくさんあります。今回挙げた本を探しに、実際に図書館の中を歩き回ってみてください。ついでに、そのまわりにある本や雑誌も手に取ってみるとさらによいと思います。

## フシギ・ふしぎ・摩訶不思議

①『そして五人がいなくなる ―名探偵夢水清志郎事件ノート―』

はやみねかおる（講談社青い鳥文庫）

②『プチ哲学』 佐藤雅彦（中公文庫）

③『さおだけ屋はなぜ潰れないのか?』 山田真哉（光文社新書）

情報センター 波多野こずえ

学生さんだけでなく、どなたにもお勧めしたいお気に入り  
の著者を三人選びました。もし、この三冊のどれかがお気に  
召したら、他の著書も是非読んでみてください。

①—この本のあとがきによると、著者はやみねかおるの好  
きな推理小説の条件は、次の四つが挙げられるという。

- (1) 名探偵がでてくること
- (2) とつても不思議な謎がでてくること
- (3) “本格”の二文字がついていること
- (4) HAPPY ENDでおわること

彼の書く“本格”推理小説は、まさにこの条件が四つとも  
満たされている、と納得させられる内容である。

推理小説、というと、登場人物が殺されるなどのイメージ

があるが、本書では殺人が起きたりはしない。

その上、たくさんの人が見ている前で次々と人が消える—  
など、「いったい何故? どうやって?’と本気で不思議に  
思ってしまうような謎に事欠かないのだ。

児童文学ながら、大人でも惹きこまれる一冊である。

②—筆者は、NHK教育テレビ「ピタゴラスイッチ」の監  
修者でもある佐藤雅彦。その発想の斬新さには、テレビでも  
著書でも驚かされる。

『ブチ哲学』は、タイトルに「哲学」と名はついているが、  
決して堅苦しい言葉も長い説明も使っていない。

普段、私たちの身の回りで普通に存在していたり、行われ  
ていたりすること。

それらをいつもとは違う視点で見してみる、著者の言葉を借  
りれば「ちょっとだけ深く考えてみる」ことで、新しい発見



がある。

「なるほど！」と感心したり、「あつ、そういうわれればそうだ！」と気付かされたり。

そういうたきつけかけを与えてくれる本である。

③―世の中には数字で表現されているものがたくさんある。

「十パーセントポイント還元」「二割引」「五十人にひとりが無料」などといった表現である。

こういうものを見て、「お得そうだ」と考えて飛びついてしまったことはないだろうか。

その前に「本当にお得なのはどれなのか？」ということを考えてきたことがあるだろうか。

この本を読めば、目の前の数字にだまされない「数字のセンス」を身につけることができる。

「数字なんか見たくもない」という人には是非お勧めしたい。

## 和光大学テニス部OB、テニス漫画を斬る！

- ①『LOVE(ラブ)』 全30巻 石渡治 (小学館)
- ②『テニスの王子様』1〜40巻 許斐剛 (集英社)
- ③『Happy!』完全版 全15巻 浦沢直樹 (小学館)

入試課 平野雅規

①―主人公の少女・高樹愛(通称LOVE)が、天才テニス少年の鯨岡と雨で中止となった試合の続きをするために、男に化けて高校へ進学する。しかしそこは男子校！女なのに男として生活していく苦労や、時間が経つにつれて周囲から女ではないかと疑問を抱かれ始め苦悩するなど、主人公の様々な心境がうかがえる。十三歳の少女が男子高校生とし

て入学なんてバレルに決まってるじゃん！と思うかも知れないが、そんな細かいことは抜きにして、テニスを知らない人でも「ああ、テニスってそうなんだ！」とわかりやすく面白おかしく楽に読めます。

②―古く言う『キャプテン翼』のテニス版？現実的に「こんな球打てないよ！」と思うことが多いですが、それはそれで楽しめます。生意気な一年生である主人公が、上級生や他的高校生を實力で打ち負かしていく姿はかつこよく見える。仲間やライバル達が色んな必殺技？を繰り広げる中で、主人公も負けじとレベルアップしていく。主人公だけでなく、周りのキャラクター達がとても個性的で、テニスをしている人には「あのキャラクターになりたい！」と思えるような魅力的な登場人物がいっぱいです！ちなみに私は同じ左利きの手塚部長が好きです（笑）。

③―①②とは違ってテニスの試合がメインというよりは、主人公とその周りの人間模様を中心に描かれた作品。幼い弟妹の世話をしていた主人公が、ひょんなことから事業に失敗した兄の借金を背負うことになり、全日本ジュニアで優勝したことのある主人公はプロテニスプレイヤーになって返済しようとする。主人公のひたむきに頑張る姿を見て借金取りまでもが応援するようになる。様々な困難や嫌がらせにも負けずに、必死に家族のために頑張る主人公の姿には心を打たれます。

小さい頃から何でも中途半端にしてきた私が高校時代に出会ったテニス。気がつけば十三年もやっており、唯一それが継続できているものです。そんなテニスの魅力や、主人公達のように何事にも諦めない心を持って頑張る姿に何かを感じて欲しいと思い、今回この三冊の本を紹介させていただきます。

した。

## 話題の本にはワケがある！

- ①『ミカ！』『ミカ×ミカ！』 伊藤たかみ （文春文庫）
- ②『愛を乞うひと』 下田治美 （角川文庫）
- ③『バカの壁』 養老孟司 （新潮新書）

教務課 須和高美

①—ふたこのミカとユウスケのなんだか懐かしい気分になれる本。

『ミカ！』は二人が小学生の時の話。オトトイという未だに何なのかわからない生き物が出てくる。

涙吸引動物とでもいうのか……そのオトトイとともに二人がいろんな意味で大きくなっていく。

そして『ミカ×ミカ！』は二人が中学生の時の話。恋をしたり喧嘩をしたり、「なんかわかるわかる」と思わず言ってしまう。寝る前に読むのがおすすめ。

②—孤児院から実母に引き取られたにもかかわらず、ひどい仕打ちに苦しむ照恵。大人になり自分に子供ができていつそ母の仕打ちの意図するものがわからず、母への憎しみと愛への渴望の狭間で彷徨っていた。そんなある日、娘に勧められて照恵は父の遺骨を探して旅にでる……。

様々な人間模様、そして生き様を垣間見られる、心に残る一冊。

③—是非これを読んでバカの壁を取っ払ってください。  
バカの壁があることで見るべきものを見ず、聞くべきことに耳を向けない、無意識にそんな人生を送っていませんか？

邪魔なプライドは捨てて、吸収する脳を持ってください。  
そのために必要なのは……。

## 二〇〇六年サッカー・ワールドカップを振り返って

- ①『ある家族の会話』 ナタリア・ギンズブルグ（白水Uブックス）
- ②『移民と現代フランス』 フランスは「住めば都」か―  
ミユリエル・ジョリヴェエ（集英社新書）
- ③『子供の十字軍』 ベルトルト・ブレヒト（パロル舎）

図書館 小海理恵

執筆時の二〇〇六年に、サッカーのワールドカップが開催されました。そこで、ワールドカップで一〜三位になった国から一冊ずつ選んでみました。意図せず生じた「移民」や「民族」という裏テーマに、ピッチの上の現状が重なって見える

かも!?

①―優勝国イタリアは、なんといっても家族の絆が強い国。この本は、作者ナタリア・ギンズブルグの自伝的小説で、ファシズムが迫り来る北イタリアを舞台に、第二次世界大戦を乗り越えたユダヤ系イタリア人家族の話です。「戦争」+「ユダヤ」―暗い、重いというイメージがありますが、この作品は、大変な時代の辛い経験を淡々と記し、タイトルどおり家族の会話や行動描写から、心優しく、知的で自由な家族の姿を描いています。須賀敦子の類まれな才能により、どこの家族にもある家族だけに通じる言葉や、呼び名などが自然な日本語へ翻訳され、作品の世界や空気が余すところなく伝わってきます。冷静な筆致で戦争や人種差別に対する怒りや家族への愛を深く掘り下げたギンズブルグと、瑞々しく、繊細な、そして端正な須賀敦子の世界を同時に堪能できる一冊で

す。

②—フランスの国民的英雄といえバジダン。彼はアルジェリア移民二世ですが、国民から愛されている姿に、フランスは移民に優しく、寛容な国というイメージを持っている人も多いのではないでしょうか。文化、宗教、民族など背景の異なる移民が大量に流入し、今フランスでどのような問題が起こっているのか、フランスは本当に「住めば都」なのか、本書は、さまざまな立場、主義、人種の人へのインタビューを通して迫ります。移民が抱える問題や、移民に係わる法律の変遷が紹介され、フランスの移民問題を考える入門書としてお勧めです。

③—一九三九年、ナチスドイツの侵攻により第二次世界大戦が始まったポーランドで、戦争を逃れて旅に出た子供たち。

吹雪に消えた子供たちはどうなってしまうのか—中世の「十字軍」や「ハーメルンの笛吹き男」の伝説を踏まえたブレヒトの幻想的な哀しい詩です。この詩から約七十年後、ポーランドからドイツに移住した少年が、ドイツ代表として大会得点王に輝きます。この少年、クローゼ選手の活躍に、ポーランドとドイツという複雑な歴史を持つ国の間に過ぎた月日をおもうとともに、平和を願わずにはいられません。

## 「人間」が気になる ～当世総務課気質～

①『神戸在住』全10巻 木村紺（講談社）

②『真田太平記』全12巻 池波正太郎（新潮文庫）

③『アフター0』全6巻 『アフター0 Neo』1巻 岡崎二郎（小学館）

総務課 鈴木裕久

①—みなさんは神戸に行ったことがありますか。この作品は、神戸に住み、北野にある大学の美術科に在籍している主人公・辰木桂の日常を描いた漫画です。みなさんの中にも芸術学科の方がいると思いますが、この作品で桂は油絵を専攻しています。しかし、作品の中心は、芸術の授業だけでなく、友人と遊びに行ったり、人間関係に悩んだりする桂の大学四年間のキャンパスライフです。特徴的なこととして、実在する多くの風景が出てきます。町並みや本は実在するものが多く取り上げられています。一方、友人がアルバイトしているCD屋は実在しなかったりします。この織り交ぜ方がこの作品の楽しみ方だと思います。

大学生が題材になっている作品はたくさんありますが、この作品は人物一人一人の感情など、丁寧に作りこまれている作品です。また細かい描写なども特徴的で味わいがあります。ぜひ一度読んでみてください。

②—池波正太郎の時代小説は『鬼平犯科帳』も含め、読者を物語に引き込む強い力を持っていると思います。この作品は戦国時代の武将・真田家の父昌幸、兄信幸および弟幸村を中心に描いています。真田家は、作品序盤では武田家の武将として繁栄するのですが、動乱の世に突入し、関が原の戦い、大阪冬・夏の陣と時代が進むに連れ、一家は敵と味方に分かれます。遂には兄弟同士の戦いへと進んでいきます。その様には、家を存続させるためとはいえ戦国時代の辛さが垣間見えまます。また、真田といえは真田十勇士を思い浮かべる方もいるかもしれません。この小説の中には十勇士は出てきませんが、忍者の存在は大きく取り扱われ、表舞台と裏舞台の対比が色濃く出ている小説です。戦国時代が好きなおすめです。

戦国時代の武将が家を残すためにどんなことを考えたか。

戦国の世から江戸時代に入っていく中で、真田家はどのようになつたのか。戦国時代や武将が好きなた方にはぜひ読んで欲しいです。

③—作者の岡崎二郎という漫画家はSFのジャンルでは抜きんでいると思います。この作品は短編集でありながらシリーズがちりばめられています。一つ一つは当然独立している話なのですが、中には同じ会社が出てきていたり、前後で話が連携していたりする場面もあって、ちよつとしたストーリーシステムのようになっています。特に「大いなる眠り子」シリーズはその中でも数多く出てくる作品です。このシリーズは簡単にいえば、殺された父の魂が主人公の子供のあきおに入り、妻由美子とともに、さまざまな事件を解決していくという物語です。展開が早くおもしろく入っていけると思いますが、中には社会的な作品も多く、考えさせられることも多い作品です。

①—広がる格差社会の中で子ども達が今どんな状況にあるか。親の経済格差がそのまま反映して就学援助が無いと学校に行けない子どもは多い。作者の感性、論理展開いろいろな面において素晴らしい作品だと思います。

## 子どもをいつくしみながら……

- ①『子どもを大切にする国・しない国』 浅井春夫 (新日本出版社)
- ②『井上ひさしの子どもにつたえる日本国憲法』 井上ひさし (講談社)
- ③『サラダとまほうのおみせ』 カズコ・G・ストーン (福音館書店)

図書館 大野陽子

①—広がる格差社会の中で子ども達は今どんな状況にあるか。親の経済格差がそのまま反映して就学援助が無いと学校

にも行けない子どもが急増している現実。競争と希薄な人間関係の中、自己肯定感が持てず、生命の大切さがわからない子ども達。これらの貧困の原因に、新自由主義の下での親の労働条件の悪化や子育て政策があることを明らかにしています。家族、学校、社会と、これからどんな広がる子ども世界で、何を大切にしていくなか考えさせられます。

②―日本国憲法前文と第九条を子どもにもわかりやすい文章にしてあります。絵はいわさきちひろです。憲法が作られた頃の、戦争はもう嫌だという国民の気持ちと、この憲法で国を作ったという誇らしさが伝わってきます。大原稜子さんの『おくにことばで憲法を』という方言で憲法を語る本もありますが、誰かの言葉で語られる憲法は、とてもあたたかく、生き生きと感じられます。

③―我が家の三歳の娘が大好きな絵本です。『こどものとも』で『やなぎむらのおはなし』としてシリーズになっています。柳の木の下にある小さな虫たちが住む小さな村が舞台。ある日、いも虫が引越してきてレストランを開きました。メニユーは美味しいサラダと魔法。魔法とは一体？アブラカタブラの声で魔法が始まります。色鉛筆で丁寧に描かれた絵本です。虫たちの表情がとても豊か！特徴もすっかりわかります。散歩の途中、虫を見つけるのが楽しみになります。ただし、読み聞かせは大変です。細かい絵なので、じっくり見ているととても時間がかかります。しかもシリーズなので、「次はこれ読んでー」と、何冊も読むことになります。

夜、幼い娘におふとんの中で読んであげる本は、大人が読んでも面白いものばかり。家族三人が今一番気に入っているのは、いとろひろしさんの『ごきげんなすてご』シリーズ。



ゲラゲラ笑いながら読んでいます。

## 熱くなれ！

- ①『会社ってなんだ ―日本人が一生すごす「家」―』三戸公（文眞堂）
- ②『ファシリテーション入門』堀公俊（日経文庫）
- ③『サラリーマン金太郎』全20巻 本宮ひろ志（集英社）

進路指導課 小泉利明

①―著者は、日本の経営の秘密を「家」の概念で解こうとしています（「まえがき」より抜粋）。会社に入社する前、また、入社した後も「序列化」がみられることもあります。会社がある家であるとするならば、「家族」とは正社員ですよ。では「家族」になれない人はどうすればいいのでしょうか。また、せっかく入れた会社、つまり「家」を守るために、家族であ

る正社員は、滅私奉公して「利の論理」で働くと著者は述べています。「ウチの会社」と私たちはよくいますが、家には今やいろんな「ダイバーシティ」がみられます。また、「距離感」が世代ごとに異なっているのも事実ではないでしょうか。会社で働く前にじっくりと読んでおきたい一冊です。

②―「ファシリテーションとは集団による知的相互作用を促進する働きのことである」と著者は述べています（p21）。状況対応型リーダーシップのように、場面に適したリーダーシップのあり方も変化しています。そこで、チーム内における議論をより深め、議論を促進していくスキルが必要となつてきます。それがファシリテーションです。一対一のコミュニケーションに加え、全体・場を見る力、そして、どのように目的を達成していくのかを、チームとともに（あるいは外から）深めていくことができるスキルが大切ではないでしょう

か。コミュニケーション、サークルなどの会議における進行役に不安のある人はぜひ。

③―「責任を果たし終えた後の気持ちよさを味わおうじゃねえか。みんなで一緒にだ」(第2巻より抜粋)。組織で仕事をする上では、周囲を巻き込む力が必要となってきます。私に仕事で、忘れかけていた「何か」を思い出させてくれたコメントの一つです。一生懸命になる(熱くなる)ことが、かつこ悪いと思えるような時代だからこそ、熱くなることは大切なのだと感じています。そして、周囲に伝えることも大切なのではないでしょうか。経済産業省の「社会人基礎力」においても「前に進む力」や「チームで働く力」が必要であると述べられています。ぜひこの本を読んで熱くなつてほしいなあと感じます。「仕事」っていいものだよ。

## 大活躍☆和光O・B・O・Gに続け！

- ①『パソコン革命の旗手たち』 関口和一 (日本経済新聞出版社)
- ②『浦安図書館にできること』 常世田良 (勁草書房)
- ③『三匹のぶたの話 新釈』 黒田愛 (白泉社)

情報センター 市村省一

①―パソコンがマイコンと言われていた時代から「Windows 95」が登場する頃までの日本のパソコン史に隠された若者たちの活躍を、膨大なインタビューをもとに生き生きと描いたノンフィクション。パソコンがどのように生まれ、普及していったのか。個人・企業間の確執・攻防や製品開発の裏話など、技術に詳しくない者でも面白く読める一冊。

ところで、本書の一ページ目には何と「和光大学」という言葉が登場する。日本のパソコン史を語るうえで欠かせない

人物・古川享（元マイクロソフト日本法人会長、現慶応義塾大学教授）が通っていた大学の名前としてである。彼は心理学を勉強したくて、三浪して和光大学の人間関係学科に入学するのだが、学生時代、当時、早稲田大学の学生であった西和彦と秋葉原で出会ったことがその後の彼の人生を変えることになる。二人は、自らの関心事を見つけたことでともに大学を中退するが、この時の古川の選択は、梅根悟初代学長が唱えた「ポジティブな」退学のススメ」と相通じるところがあったのではないか、と思う。

②―浦安市立図書館の開館二十周年を機に、同館の館長をつとめてきた著者（人文学部専攻科修了、現日本図書館協会事務局次長）による図書館・図書館職員論を集成し、単行本化したもの。浦安市立図書館と云えば、日本の公共図書館界のトップランナー的存在であることはよく知られている。図書館経営に関する高い識見と確かな実践、具体的なデータに裏打ちされた著者の主張には説得力があり、公共図書館の活動に関心のある人に是非お勧めしたい。

③―英国民話『三匹のこぶた』をユニークな解釈と迫力のある絵で描いた作品で、絵本雑誌『MOE』のイラスト・絵本大賞でグランプリを受賞し、発刊されたもの。二十三歳の若さで急逝した著者（イメージ文化学科の第一期卒業生）のことは、図書館の梅根記念室で開催された遺作原画展で知ったのだが、描かれたキャラクターたちの独特な質感やインパクトのある画風に魅きつけられたのを覚えている。ストーリーもブラックなのが面白い。才能が高く評価され、今後の活躍が期待されただけに、著者の早逝が惜しまれてならない。

和光大学出身者の活躍を多くの人たちに知ってもらいたく

て選びました。これを機に、大学としても、OB・OG（中退者に活躍者が多い？）の活躍を在学生・受験生に広くアピールしていければいいなと思います。

## 自分の「力」になる本

①『ハッピーバースデー』 青木和雄（金の星社）

②『三コ』 斎藤隆介作、滝平二郎絵（福音館書店）

③『絹扇』 津村節子（新潮文庫）

図書館 瀧桂子

①―「ああ、あすかなんて、ほんとうにうまれなきやよかつたなあ」。

主人公のあすかは、十一歳の誕生日に母親から言われた言葉で声を失ってしまう。そして、祖父母の愛情の中で「自分」

を取り戻し、問題に背を向けずに生きること決心し、十二歳の誕生日を迎える『ハッピーバースデー』。

「心理学をやってみたい」という言葉を巷でよく聞く。自分の「成分占い」という摩訶不思議な占いがインターネットで流行っている。「自分とは何か」という命題は、声に出すのはカッコワルイと思うている人たちにも大きな関心事となっている。

自分を見失ってしまいそうなときに、読んでほしい本である。

②―二冊目は『三コ』。秋田のでいだらぼっちの物語。

仕事がなく生きていくのに困っている村人たちのために、あちこちの山から持ってきた木を植える。その木を育て、切り出すことで村人たちは生計を立てられるようになる。

ところが、その山が火事になる。

もう消すすべがなく、泣き叫ぶ村人たちに「たっしやでく  
らせよ」と声をかけ、ぼうぼうと燃え盛る山に、覆いかぶさ  
っていく三コ。

本当の「勇氣」とは何だろうか。読むたびに考えさせられ  
る。

③―そして、最後に紹介する『絹扇』は、明治二十一年生ま  
れのちよが主人公。白羽二重で有名な福井の絹織物の機織で  
ある。

電力の供給によって、手織りから力織機に変わり、第一次  
大戦後の株価の暴落で多くの工場が影響を受ける。もちろん  
ちよの工場も。そして、関東大震災で輸出用の倉庫の荷が全  
滅してしまう。

そんな激動の時代に、現実を受け入れて生きる彼女の姿は  
たくましい。

今回は自分の「力」になる本三冊をピックアップした。

『三コ』は、これから中学生という不安定な時期を迎えた  
六年生の子どもたちに、読み聞かせのプレゼントをした本で  
ある。「生きること」を考えてほしいという、秘かな願いを  
込めて。

どの本も、ぜひ手にとってほしい。

## リアルな写真が見る者の心を洗う

①『家族の日記 写真集』 小倉英三郎 (未來社)

企画広報課 柳沢茂夫

①―ピュアな家族愛、自分と自分の家族、突然、奥さんに  
降りかかった病氣とやがて迎える死別。その日々をリアルに

淡々と写している。写真の日付の意味が非常にリアルな写真としての役割を果たしている。この家族は懸命に生きて、筆者にもここに写っているお子さんにも永遠にお母さんは生き続けているだろう。がんの診断を受けてもなお氣丈に明るい妻とそれを見守る作者の心の葛藤がみごとに表現されている。写真が持つその時々との記録性と写している作者の心情に、読むものは共感せざるを得ない。私は、最初に写真展を見たとき、涙を抑え切れなかった。ピュアな心の方ほど涙する作品です。自分も心を洗うときに開く写真集です。



## 平和あつての日常

- ①『父と暮せば』 井上ひさし (新潮文庫)
- ②『塩狩峠』 三浦綾子 (新潮文庫)
- ③『あなたが世界を変える日』 セヴァン・カリス＝スズキ (学陽書房)

図書館 吉松順子

このごろは、明日のお弁当のおかずは何にしようかと思ひ悩んだとき、見るのが料理の本。困難に向かい合ったときは、占いや手相、魔法の言葉の本。軽く楽しいものが読みたいなあと思ったときは、落語や『がばいばあちゃん』。そんな場当たり的に本を選んでいるけれど、ふと、今、元気に楽しく生活できているのは、平和な世界に生きていられるおかげだわと、急に平和と今の地球を考えてみたりする。

そんな時、思い浮かんだのがこの三冊。ほっとします。

①—ヒロシマに原子爆弾が落とされてから六十一年。被爆者は高齢化し、戦争を語り継ぐ人々も年々亡くなっている現状だ。本書は、ヒロシマで被爆し、すべての身寄りを失った娘と、亡霊となつて娘と会話する父（実はもう一人の自分）の戯曲だ。登場人物はきわめて少ない。生き残ってしまった自分が幸せになる事は許されないと思い込む娘。涙あり笑いありのテンポよい会話から、原爆のすさまじさと戦争のむごさを強く感じる。さらに、「死者たちの怨念を聞かされるのではなく、自分達の分まで元気に生きて、生きる事を楽しんでくれ」と激励される。映画もおすすめ。

②—塩狩峠の頂上にさしかかった時、突然客車が離れて暴走し始めた。もしこの客車に乗り合わせたとしたら、自分はどうするだろうか。恐怖におびえて身動きできないのではないかとと思う。本書の主人公永野信夫は、自らの身を挺して列車を止める。「小説だからだよ」と思うかもしれない。しかし、主人公のモデルは、実在したのだ。「自らを犠牲にして大勢の乗客の命を救った青年の愛と信仰に貫かれた生涯を描き、生きることのいみを問う」小説。

③—一九九二年六月ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開かれた国連の地球環境サミット。カナダ人の十二才の少女セヴァンが世界各国のリーダー達を前に六分間のスピーチをした。「あなたたち大人は、私たち子どもに世の中でどうふるまうかを教えてくださいます。たとえば争いをしないこと。話し合いで解決すること。……ならばなぜあなたたちは、私たちにするなということをしているんですか……」「どうやって直すかわからないものをこわしつづけるのはもうやめてください」。ドキッとすることのスピーチは、こどもならではの

える真実を語り強烈だ。あれから十年余。大学を卒業したセヴァンは、NGOを立ち上げ、世界中の人々に語りかける。「人がけんめいに自然を守ろうとするのは、それなしに自分自身はありえないからです」。私たちが、環境問題を考えて行動すれば、「世界をよりよい場所へとかえていくことができる」のだと気づかせてくれる。

## 書き手の人生に魅せられて

①『嘘つきアーニヤの真つ赤な真実』 米原万里（角川文庫）

②『園芸家12カ月』 カレル・チャペック（中公文庫）

③『おばあさんになるなんて』 神沢利子（晶文社）

図書館 石谷エリ子

①―両親の仕事の関係で、著者が在籍した一九六〇年代の

チエコ・プラハのソビエト学校は、社会主義を理想とするインターナショナルスクールで、授業は全部ロシア語。自国の誇りを過剰に背負った個人的なクラスメートたち―ギリシア人のリツア、ルーマニア人のアーニヤ、ユーゴスラビア人のヤースナーとの刺激的な日々と、その三十年後、激動の東欧で三人を捜し当て、再会を果たす過程が生き生きとドラマティックに、情熱をこめて描かれている。学校時代のことを鮮明に記憶し、いつも愛着をもって心にかけてきたからこそ、実現できた再会の日。マリがロシア語でアーニヤは英語でお互いの思いを率直に語り合う、そこに彼らがそれぞれ歩んできた厳しい道のりが明らかにされるのだ。

著者はロシア語同時通訳第一人者で、二〇〇六年五月に五十六歳の若さで病に倒れた。無念でならない。

②―この本を買ったのはまだ大学生のころ。「園芸」につ



いては全く無関心で、小さいときからのお気に入りのおチャペックの、兄ヨゼフの挿絵が魅力の、二百四十円の文庫本だったから。当時はたぶん詩集をばらばらめくるようにして読んで、あとは本箱にじつと待機。それから三十年、突如土いじりに目覚めた私は、「園芸」本を涉猟しはじめ、本箱のすみからチャペックがよびかけた、というわけ。で、読み返してみると、チャペックが本当に花づくり、土づくりを熱愛していたことにあらたな親近感をおぼえた。いわく「この世にあるものはすべて、土に利用できるものか、できないものか、どっちかだ」「その庭に育つのはただのバラではなくって、彼のバラなのだ」。ほぼ八十年も前に書かれたにもかかわらず、新鮮な園芸知識のつまった、愉快な園芸マニア本である。

③―『くまの子ウーフ』の著者がおばあさんになるなんて？という好奇心で手にとった本。「あなたの人生を語って下さ

い。それを聞き書きの本にしましょう」という編集者の誘いで綴られた神沢さんの半生にすっかり引き込まれた。「わたし今、七五歳。皺よった吊し柿が、いい風に吹かれている気分」という神沢さんだが、その生い立ちは波乱万丈。樺太で少女時代を過ごし、文化学院で出会った夫ともども結核に苦しみながらも二人の娘の子育て。その中で童話を書き始め、やがて家計を支えるまでに。心の中にいまでも小さな女の子がいて、「わからない、わからない」といつている「なりゆきのおばあさん」に導かれて、『流れのほとり』（福音館書店）、『いないいないばあや』（岩波書店）とひといきに自伝的作品を読むことができた。

元来、「妄想の森」の住人なので、ノンフィクションは苦手な領域のはずが、今回ははからずも全部、「実話」。というのも書き手のお三方をその作品ともども、長きにわたって敬

愛してやまないからであります。で、目下の私の妄想は「プラハのカレル橋のたもとで愛を語る」デス。

## 本と現実の行き来でパワーアップ

①『嫌われ松子の一生』上下 山田宗樹（幻冬舎文庫）

②『お目覚めピアノでワッツハッハ！』―世界をつなぐ「地球ハーモニー」―  
河野康弘、河野明佳（リサイクル文化社）

③『オオカミ族の少年』 ミシエル・ペイヴァー作、酒井駒子画（評論社）

図書館 中林多万子

①―人生を踏み外す人がいる。何故か？本書は変死体で発見された主人公松子の人生を、その存在さえ知らなかった甥が捜し求めていく小説。国立大学卒業後教員になった松子が、校長のセクハラを機に、人生の転落へ向かっていく。松子が

受ける怒り、戸惑い、優しき。「わかるよ！でも、そつちいっちゃだめだよ！」と叫ばずにはいられない。松子に必要なだったもの。それは、自分の心の喜びを感じ、夢を見て実現する力。問題解決の本質に気付く知識。松子の心の痛みを理解する人。人生を踏み外したら、軌道修正すればいい。それには問題解決への知識と心の痛み、喜びを共有できる人が必要。それがあれば、人は軌道修正し生きていける。そんな確信を得た作品。映画とはまったく違う視点を教えてくれる。

②―未使用のピアノを世界へ送り続けているジャズピアニスト、河野康弘氏の半世紀を綴る活動記録。愛娘明佳氏との共著。

ジャズとピアノを愛し、BGMでない自分のジャズ演奏場を求め、ゆきついたのが「出前コンサート」。各家庭、畑の真ん中、小舟の水上演奏から、大きなホールまで、世界各国、

多種多様。年三分の二は旅の毎日。家族はそんな彼を温かく見守り、応援し協力を惜しまない。全国の旅で多くの環境破壊、教育現状を目にする。彼の活動はいつしか自然保護、差別のない世界平和の訴えとなる。添付のCDは、ジャズと、ミュージシャンにはめずらしくおしゃべりなMC。分かり易い等身大の言葉で環境問題、世界平和を訴える。愛娘の明佳氏の目が温かい。

③―物語は紀元前四〇〇〇年、ヨーロッパ北西部全体が森林でおおわれていた時代。狩猟採集民の主人公トラク少年とその父親が、巨大な熊に襲われる場面から始まる。重傷を負った父は、臨終を迎え「精霊の山」を探すことをトラクに誓わせる。多くの謎を感じながらも一人旅にでるトラク。彼を助けるのは、「精霊の山」の案内役である生まれまして三ヶ月のオオカミの子ウルフとワタリガラス族の少女レン。二人と一

匹の旅を続け成長する中で、トラクは、自分の生い立ち、父親の秘密、何故自分が精霊の山へ向かうのかを知る。今から六千年前の物語であるが、自然と共存し自然から学ぶ「技」と「聞く耳」。それらは、現代を生きぬく力と変わらないことを教えてくれる。物語の随所に多くの疑問を残す。なんと本書は、六巻シリーズの第一巻。わくわくしながら次巻の出版を待てる一冊に巡り合った。

私の読書、それは現実逃避であり、本の中で私は自由に遊び回る。そして、得た知識に教えられ、現実の人生を、より楽しく幸せに生きていけるといふビジョンを知る。それが嬉しくて、また新たな出会いを求めて、本を探している。

## ヒューマンとネイチャー

- ①『山の輪舞 ——水越武写真集——』水越武（山と溪谷社）
- ②『夜と霧』ヴィクトル・E・フランクル（みすず書房）
- ③『音楽展望』全3巻 吉田秀和（講談社）
- ④『ソロモンの指環』コンラート・ローレンツ（早川書房）

学部事務室 上田茂

①—著者は日本を代表する山岳・自然写真家である。被写体を予め研究し、周到な準備の上に撮影に取り組むという手法をとることで知られている。山の写真といえば「大型のカメラで撮影する」という常識を破り、三十五ミリ版小型カメラの機動性を活かして悪条件のなかでも撮影することにより、動感あふれるダイナミックな映像を提示した。また、山を博物誌的に捉えて、山岳風景だけでなく動植物を山と一体

のものとして撮影している。今改めて見てもその新鮮さは全く失われていない。この本は絶版となっているが、同じ著者の『日本の原生林』（岩波書店）は書店で入手でき、お奨めである。自然関係の写真集としては、私と同世代で四十代の若さで亡くなった星野道夫の写真集もぜひ見てほしい。

②—この本は大変重い内容の本だ。ナチのユダヤ人強制収容所から生還した精神医学者が、その過酷極まる体験を書いた。読んだのは三十年も前なので詳しい内容をここで書くことはできないが、戦争とは、人間とは、ということを否応なく考えさせられる本である。すべての人に読んでほしい、いや、読むべき本である。

③—九十歳を越した現在も音楽評論家として筆をふるう著者が、戦後まだそれほど時を経ていない一九五〇年代のヨ―

ロッパの地での音楽体験を綴った本。今よりはるかにヨーロッパというものが遠かった時代に、この本はいやが上にも私のヨーロッパへの憧れを高めた。フルトヴェングラーを始めとした巨匠たちが綺羅星のごとく活躍していた時代の話である。現在は、『吉田秀和全集』（白水社）にも所収されている。

④―動物行動学者が書いた本だが、一般向けに書かれているので、誰にでも読める。そして、とても面白い。その後の研究により、ここに書かれていること（理論）には誤りも少なからずあるというが、専門家でない我々はまずはそれに捉われずに読んでみよう。まるで動物園のようだった、ローレンツの屋敷での様々な動物たちとの交流と、そこから著者が見つけた動物の行動の構造。動物好きにはたまらない本。

## 青空の下、風を感じて〜優しさとちよっぴりの切なさ〜

①『ソロモンの指環』 コンラート・ローレンツ （早川書房）

②『わたしと小鳥とすずと ―金子みすゞ童謡集―』 金子みすゞ（JUR A）

③『人間の土地』 アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ著 堀口大學訳

（新潮文庫）

図書館 森山七穂美

①―生き物が好きな人には、たまらなく愉快的な本。サブタイトルにあるとおり「動物行動学入門」書、いわば自然科学の書として、ローレンツ博士の言葉によれば「ひたすら事実」に忠実に「著されたものである。が、いや、それ故に？文章にも、彼自身（と、もう一人）の手になる挿絵にもユーモアがたっぷり、そして生き物を描く一本一本の線にも対象への思いがこもっている。タイトルは、旧約聖書にでてくるソロ

モン王が、魔法の指輪をはめて全ての生き物と語ったという話からとられている。「そんなことは私にだってできる……自分のよく知っている動物となら魔法の指輪などなくても話ができる。この点では、私の方がソロモンより一枚うわてである」と博士は言っているが、タイトルも素敵だと思う。

②―金子みすず全集の中から選ばれた六十編をまとめた童謡集。過ぎていく日々のなかで、忘れられ、気づかれずにきた、ささやかなもの、かすかなもの、見えないものにさえ、さまざまな思いをかけ、ひとりつぶやいているような一編一編、どの詩も読むたびに胸を衝かれる。二十歳の頃から投稿した誌上で西條八十に絶賛されたという豊かな才能に恵まれながら、二十六歳で自ら世を去った短い詩人の生涯を知ると悲しい。

③―「ぼくら人間について、大地が、万巻の書より多くを教える」というドラマチックな、ちよつと古めかしい文から始まる。若い人たちには読みにくいものかもしれないが、古めかしいといっても詩人の翻訳である。格調高く美しい。サン||テグジュペリは、飛行機がまだ地上の目標物や空の星を頼りに飛んでいた時代の職業飛行家であり作家であった。飛行家たちの命をかけた体験を語りながら「……きみの数々の冒険の中でも、特に美しい一つを語ることによって、ぼくが現したいと希うのはそれとは別のことだ」と。三十年近くを経たためて読むと、現れてくるそれはあまりに気高く、深く、そして野蠻だ。一九九八年の改版には「空のいけにえ」と題する宮崎駿の解説が加えられている。たった七ページの中に飛行機という道具を作り出した人類の歴史が凝縮されている。「サン||テグジュペリの作品や、同時代のパイロット達が好きになればなる程、飛行機の歴史そのものを冷静に捉

えなおしたい」という一文とともにずつしりと重い。

『人間の土地』は是非「空のいけにえ」とセットで読んでほしい。

## 今、江戸時代がオモシロイ！

### 〜食わず嫌いを直す秘策〜

①『元禄流行作家 ―わが西鶴―』 藤本義一（新潮文庫）

②『橋の上の霜』 平岩弓枝（新潮文庫）

③『葛屋重三郎 ―江戸芸術の演出者―』 松木寛（講談社学術文庫）

図書館 沢里冬子

〃本を読もう！〃職員版とはいえない、My favorite books  
になってしまった。

二〇〇六年の夏休み読書のたのしみは、ひよんなことから

わたしの苦手なはずの日本の作家の作品で始まり、今もまだ  
その流れは続いている……

①―西鶴といえは、〃日本の小説史上最初にして最大の町  
人作家〃とどこかの本で読んだように近世文学の大家という  
イメージであり、図書館にある『定本西鶴全集』のようにな  
んとなく近寄りたがい存在だった。それが、江戸時代当時、  
西鶴は流行作家だったのだ……という驚きで読み始めた。弟  
子の年若い団水の眼を通して語られる西鶴は、時に自信にみ  
ち、苦悩し、名声を追う野心満々の姿でたち現れる。西鶴と  
いえは一代もの、『日本永代蔵』などがまず思い起こされる  
が、天才俳諧師として名を上げながらも、俳諧の本流とはな  
れずに、芭蕉への葛藤や屈折した思いをからませながら、浮  
世草子へと突き進む西鶴の姿が、生身の人間の凄みを持って  
大作家としての高みからわたしの近くに降りてくる、そんな

気にさせてくれる一冊である。

②—この本は、狂歌師四方赤良のちの蜀山人である大田直次郎の半生を描いた小説である。

武士としての大田直次郎、唐衣橋州、朱楽菅江とともに狂歌三大家といわれる大田直次郎こと四方赤良の姿が、同時代の狂歌仲間元木綱、加保茶元成や、戯作者山東京伝、後にやってくる滝沢馬琴、出版人蔦屋重三郎たちとの交流や、当時の文化人たちの社交場とも言われた吉原での出来事など、様々な出来事を通して語られ、江戸という時代の流れや、人々の生き方、文化の盛衰をまざまざと見せてくれる。狂歌師の名の面白さも興味はつきないが、この時代の黄表紙、浮世絵へと興味は次々とひろがり、しばらくは江戸から離れられなくなりそうだ。

③—喜多川歌麿、蜀山人、写楽などなどについて読んでいると随所に「蔦屋重三郎」が登場してくる。いったい蔦屋重三郎とはどういう人なんだろうと興味津々でよみはじめた。サブタイトルの「江戸芸術の演出者」が示すように、吉原細見（今風に言えば吉原を知る情報誌）の小売取次業から出版に転じ作家や絵師を見る眼力や独創性を持って出版人として急成長を遂げる蔦屋重三郎が見えてくる。狂歌、黄表紙、浮世絵の隆盛に蔦屋重三郎はどのような役割を果たしていたのかを、享保から寛政へと揺れ動く時代の変化とともに、歌麿、京伝、写楽など作家、絵師たちとのかかわりを通して語ってくれる。一人の人間の存在を通して、今の時代にもつながる出版というもののすごさを、感じさせてくれる。

図書館には、自分の本棚にはない本がいっぱい。書架の間をぶらぶらして、ふと手にとった本から、食わず嫌いだった



日本の作家の作品へ、江戸時代へ、そして時代小説へとひろがって、第?次マイブームはやってきた……。



どうやって

本を手に入れるか？

では、ここであげられている本を手にするにはどうしたらいいのか。「借りる」と「買う」のふたつの場合に分けて、ざっと説明しておきます。

## 【借りる】

◎和光大学図書館の特設書棚で借りる。

和光大学図書館内に書棚を特設しました。そこに、ここで推薦された本を、基本的には何冊かずつ置いてあります。場所はカウンターの先、レファレンス・コーナーの入り口の

あたりです。

関連本その他、知りたいことがあれば遠慮せずに図書館員に相談してください。

◎近所の公共図書館で借りる。

小説や軽いエッセイ集といった比較的やわらかな本は、専門書中心の大学図書館よりも、近所の公共図書館のほうががしがしやすいでしょう。

いまは公共図書館でも目録をオンラインで公開しているところが多いので、図書館に行くまえにインターネットで調べておくと無駄足を踏まずに済みます。

ちなみに、和光大学図書館は町田市立図書館と協力貸出の協定をむすんでいます。つまり、和光の図書館カウンターで町田市の本も借りられるというしくみができているわけですから、どしどし使ってみてください。

## 【買う】

◎新刊書店で買う。

いまは一年に八万冊以上の本が出版されています。この数は、いっばんの書店に扱える量をはるかに越えています。

したがって、ちょっと古い本やあまり売れない本は、たちまち書店から姿を消してしまいます。オンライン目録を公開している大型書店の場合、前もってインターネットで在庫の有無をしらべておくといいでしょう。

いそいで入手したい場合はオンライン書店を利用するといいい。もちろん送料はじぶんで負担しなければなりません（友だちと共同で何冊か購入すれば、ほとんどのオンライン書店で送料がタダになります）。

◎古書店（古本屋）で買う。

ふらりと入った古書店で必要とする本をピタリと探せる可能性はほとんどありません。古本屋は「本との偶然の出会い」をたのしむ場と割り切ったほうがいいでしょう。

ただし、山とか映画とか植物などの専門書店のばあいは別です。じぶんが関心のある分野の専門書店をみつけておくといいでしょう。

したがって、すぐ欲しい場合は、オンライン古書店の利用をすすめます。複数の古書店が共同でひらいているホームページがいくつもありま

すから、それをつかえば、たいていの本は見つかると思います。

もちろん、ネット・オークションでやすく入手することもできます。すぐに必要な本にぶつかる可能性はあまりありませんけどね。

# 「本を楽しもう!」第一集ブックリスト

2008.3現在

## あ行

- 『愛を乞うひと』 下田治美  
角川書店《文庫》 1993年 504円
- 『あなたが世界を変える日』 セヴァン・カリス＝スズキ  
学陽書房 2003年 1,050円
- 『アフター0』(全6巻)・『アフター0 Neo』(1巻)[マンガ] 岡崎二郎  
小学館 1990～2004年 @509～530円
- 『ある家族の会話』 ナタリア・ギンズブルグ  
白水社《新書》 1997年 998円
- 『井上ひさしの子どもにつたえる日本国憲法』 井上ひさし  
講談社 2006年 1,000円
- 『移民と現代フランス』 ミュリエル・ジョリヴェ  
集英社《新書》 2003年 882円
- 『嘘つきアーニャの真っ赤な真実』 米原万里  
角川書店《文庫》 2004年 580円
- 『浦安図書館にできること』 常世田良  
頸草書房 2003年 2,730円
- 『園芸家12カ月』 カレル・チャペック  
中央公論新社《文庫》 1996年 520円
- 『オオカミ族の少年』 ミシェル・ペイヴァー作、酒井駒子画  
評論社 2005年 1,890円
- 『オール・アバウト・コーヒー』 ウィリアム・H・ユーカーズ  
TBSブリタニカ 1995年 30,582円
- 『おばあさんになるなんて』 神沢利子  
晶文社 1999年 1,680円
- 『お目覚めピアノでワッハッハ!』 河野康弘、河野明佳  
リサイクル文化社 2006年 2,100円
- 『音楽展望』全3巻 吉田秀和  
講談社 1978～1985年 1,029～1,260円

## か行

- 『会社ってなんだ 日本人が一生過ごす「家」』 三戸公  
文真堂 1991年 1,529円
- 『家族の日記 写真集』 小倉英三郎  
未來社 1995年 3,675円
- 『絹扇』 津村節子  
新潮社《文庫》 2006年 620円
- 『嫌われ松子の一生』(上・下) 山田宗樹  
幻冬社《文庫》 2004年 @599～630円
- 『元禄流行作家 わが西鶴』 藤本義一  
新潮社《文庫》 1983年 294円
- 『神戸在住』(全10巻)[マンガ] 木村紺  
講談社 1999～2008年 @480～540円
- 『子供の十字軍』 ベルトルト・ブレヒト  
ハロル舎 2005年 1,575円
- 『子どもを大切に作る国・しない国』 浅井春夫  
新日本出版社 2006年 1,785円

## さ行

- 『さおだけ屋はなぜ潰れないのか?』 山田真哉  
光文社《新書》 2005年 735円
- 『真田太平記』(全12巻) 池波正太郎  
新潮社《文庫》 2005年 @740～820円
- 『サラダとまほうのおみせ』 カズコ・G・ストーン  
福音館書店 1997年 840円
- 『サラリーマン金太郎』(全20巻)[マンガ] 本宮ひろ志  
集英社《文庫》 2004～2005年 @649～669円
- 『三コ』 斎藤隆介  
福音館書店 1981年 1,260円
- 『三匹のぶたの話 新釈』 黒田愛  
白泉社 2007年 1,365円

- 29 『塩狩峠』 三浦綾子  
新潮社《文庫》 2005年 660円
- 30 『そして五人がいなくなる』 はやみねかおる  
講談社《文庫》 1994年 609円
- 31 『ソロモンの指環』 コンラート・ローレンツ  
早川書房 2006年 1,680円

## た行

- 32 『父と暮せば』 井上ひさし  
新潮社《文庫》 2001年 340円
- 33 『荻谷重三郎 江戸芸術の演出者』 松木寛  
講談社《文庫》 2002年 1,008円
- 34 『テニスの王子様』(1～40巻)[マンガ] 許斐剛  
集英社 2000年～ @410円

## な行

- 35 『ニューヨーク都市地図集成』 太田弘  
柏書房 1997年 126,000円
- 36 『人間の土地』 アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ  
新潮社《文庫》 1998年 580円

## は行

- 37 『バカの壁』 養老孟司  
新潮社《新書》 2003年 714円
- 38 『橋の上の霜』 平岩弓枝  
新潮社《文庫》 1987年 700円
- 39 『パソコン革命の旗手たち』 関口和一  
日本経済新聞出版社 2000年 1,785円

- 40 『Happy!』完全版(全15巻)[マンガ] 浦沢直樹  
小学館 2003年～2004年 @1,000円
- 41 『ハッピーバースデー』 青木和雄  
金の星社 2004年 1,050円
- 42 『ファシリテーション入門』 堀公俊  
日本経済新聞出版社《文庫》 2004年 872円
- 43 『プチ哲学』 佐藤雅彦  
中央公論新社《文庫》 2004年 680円

## ま行

- 44 『ミカ!』 伊藤たかみ  
文藝春秋《文庫》 2004年 580円
- 45 『ミカ×ミカ!』 伊藤たかみ  
文藝春秋《文庫》 2006年 580円
- 46 『ミスタードーナツのシュトックハウゼン』 菊地成孔  
(雑誌『ユリイカ』Vol.30, No.4 1998年 青土社)  
※書籍『歌舞伎町のミッドナイト・フットボール』(小学館 2004年)にも所収

## や行

- 47 『山の輪舞 水越武写真集』 水越武  
山と溪谷社 1983年 6,090円
- 48 『夜と霧』 ヴィクトル・E・フランクル  
みずさ書房 2002年 1,575円

## ら行

- 49 『LOVe(ラブ)』(全30巻)[マンガ] 石渡治  
小学館 1994年～1999年 @398～410円

- 50 『わたしと小鳥とすずと 金子みすゞ童謡集』 金子みすゞ  
J U L A 1992年 1,260円

●このリストは「本を楽しもう！」(第1集)の本文で紹介されている本を、50音順に配列したものです。データは、書名、著者名、出版年、価格の順で記してあります。

●作品によっては様々な出版年、出版社から出版されていることもありますが、比較的購入しやすいものを優先して掲載しています。

●価格は税込表示です。「@」は多巻本の単価を表し、また、「@○円～□円」は各巻の価格帯を表します。

●原則として図書館で所蔵していますが、入手困難につき所蔵できなかったものも数点あります。お困りの際は、図書館カウンターでご相談ください。